

きなこが教えてくれたこと

手て

登ど

根こん

桐とう

矢や

「恭花、ぶっさいく」

あれ、この言葉は誰に言われたんだつけ？

「恭花、起きなさあい」

お母さんの声だ。今日は、七月六日。日曜日。父は出張で明日帰つてくる。今日は十時から三時までおでかけだ。私は、しつかりと準備し、車に乗つた。

そして、あることについて考える。

私が通う中学には嫌いな人、旭がいる。旭とは中学で初めて出会い、すぐに意気投合し、

友達になつた。でも二年になつて小学校からラスになつてから、旭は変わつた。教の友達（好きな人）、哉兎と三人で一緒のクラスになつてから、旭は変わつた。教科書が消えたり、哉兎と話そうとしたら旭が私に嫌がらせをしてくるようになつた。教

兎と話したり、金曜だつて、私が久しぶりに哉花が悪いことしたのに、謝りもせずに帰つてしまつたの「と目の前に私がいるのに、変なことを言いだした。悪い事もしていない。す

邪じ魔まし花が悪いために、金曜だつて、私が久しぶりに哉兎と話したり、金曜だつて、私が久しぶりに哉兎と話してたら「ねえ、聞いて。昨日、恭花が悪いことしたのに、謝りもせずに帰つて

るわけがない。でも、哉兎も「旭に謝った方
がいい」と言う。

その時、朝の会が始まったので、私は何も
言わず、自分の席に戻った。今までで、一番
最悪な金曜だった。月曜は、何を話せばいい
のだろう。このままだと、哉兎と友達じやい
られなくなる。だから一刻も早く、嫌がらせ
を終わらせないといけない。けど、考えれば
考えるほど、どうすればいいか分からない。
「何？ その顔？」嫌いな人でもできた？

旭のことを考えていたら、お母さんが意表
をつくことを言い出した。

「なんで、分かったの？」

私がそう言うとお母さんは少し考えてから
話した。

「覚えてる？」きなこがうちのペツトにな
つたばかりの頃、あなたときなこ、いつも喧
嘩していたでしよう。その時の顔にそつくり

「喧していきなこがうちのペツトにな
きなことは、しやべったことがある。きな
きなことは、しやべったことがある。きな

こが亡くなる約三ヶ月前から、亡くなる日の朝までよくしやべった。

そう、きなこは人の言葉をしやべることができる猫だった。きなこはいつも私をからかい、私はいつもきなこをからかい返す。きなこと話せるのは、とつてもうれしかった。

スマホの使い方を訊いてきた時もあつた。でも結局、途中で飽きていたし、なぜ訊いたのかは未だに謎だ。

そういえば明日は、きなこの命日だ。

でも今は、嫌がらせをやめる方法を考えないと。そう思つて、あれこれ考えたけど、どちらもしつくりこないままおでかけは終わつた。外は、暑く、蝉の声が早くも夏の訪れを告げていた。蝉も嫌がらせをしたり、されたりするのだろうか。

自分の部屋に行き、スマホを触る。今日はなんとなく、嫌がらせをやめさせれる方法を考える前に、きなこの写真が見たいと思つた。

きなこが笑っている写真、ご飯を食べてる
写真、きなこが亡くなる二日前に撮った私の
ひざの上で寝転んでるきなこの写真。写真を
見ると、一年前のことが蘇よみがえつてくる。
私は、ずっと一緒にいたペットと、話すこ
とができる。それはとつても楽しくて、夢み
たいだった。だから気づかなかつた。夢は長
く続かないという事を。そして、その日は訪
れた。けど、きなこに「さようなら」を言う
ことは、できなかつた。
「あれ、これなんだろう？」
写真を見ていると知らない動画がでてき
た。こんな時期に動画なんて撮つたっけ？
と思ひながら画面を見ると、そこにはきなこ
の顔が写つていた。
えたのは写真や動画の撮り方についてだつ
た。
きなこが、最後に私に伝えたかつたこと：
。
。

私は、動画を再生した。

きなこが、いすにちよこんとすわつている。
「うん、かわいい。きなこは動画を撮つて欲

しかつたのね」

お母さんの声？

そうか、お母さんにはスマホのパスワード
も教えてるから、動画も撮れたのか。

きなこがお母さんからスマホを取る。

「あつ、きなこ。お母さん料理してるから、

そのスマホは壊さないでね」

「恭花、元気か？」

きなこの声だ。顔も写つている。

「恭花がいつ、この動画を見てるか分からな
いけど、俺はもうすぐ……。でも、俺、怖く
ないんだ。だつて、生まれ変われるつて教え
てくれただろ。だから、生まれ変わつたら俺、
また恭花の猫になるんだ」

けている。
一人だから、きなこはずつとしやべり続

「あと昨日、思い出したんだけど、俺達が出
会つたばかりの頃、何回も喧嘩して、いつも
恭花が泣いていただろ。そんな時に、おばあ
ちゃんが『ありがとうつて、言うと誰とでも
仲良くなれる』と教えてくれた事が、あつた
よな。そしたら恭花が、『ありがとう。きな
このおかげで私、ペットを大切にするつて簡
単な事じやないつて分かった。えつとそれか
ら、きなこのお腹はもう触らない。だからえ
えつと、私と仲直りしてくれる?』つて、言
つてさ。このことがあつてから、俺たちは仲
良くなつたんだよな。俺、恭花に出会えてよ
かつた。じやあ、もうそろそろ動画をとめる
よ。別れ話は、できるだけ短くしたいんだ。
猫だからな。じやあな、恭花」

猫だからな。じやあな、恭花」

だ話してほしいのに。もつときなこの声聞か
せてよ。最後くらい、時間なんて忘れて話そ
う。まだ消えないでよ。私、まだ「さような
ら」言えてない。

私の瞳から涙がこぼれる。

ねえ、まだ一緒にいたい。近くできなこを

感じたい……。

最後に、もう一回きなこが写る。

「恭花、泣いているのか？」恭花ブサイクだ

な」「この言葉。そうだ、思い出した。この言葉

は前、写真を撮った時にも言われた。

それは、私のひざの上できなこが寝転んで

いる時のこと。

「俺が病院にいる時、恭花泣いてたろ？」あ

の時の恭花、ブサイクだったな。恭花、ぶつ

さいく」「

た。こうなつたら。

さいく」「

た。きなこも、病院で注射されている時うるさ

「きなこも、病院で注射されている時うるさ

かつたよね。あの時のきなこ、ブサイクだつ

た。きなこ、ぶっさいく」「

私はきなこをからかい返す。

「「ぶっさいく」「

私ときなこの声が混ざる。私達は、声を上

げて笑つた。いつぱい、いつぱい笑つた。

とっても大切な記憶。なんで忘れていたのだろう。

「恭花、ぶっさいく」

何それ。でも、それがきなこらしい。

「変に格好つけているきなこの方が、ブサイクだよ。きなこ、ぶっさいく」

私は、そう言いながら涙をぬぐい、笑みを

こぼした。

「さようなら」を言う必要なんて、最初からなかつた。だつて、これからもきなこは、私の心中で生き続けてくれる。そして、いつかまた、生まれ変わったきなこに会うのだから

ら。

今まで悩んでいたことが、嘘みたいに吹つ
飛んでいき、希望が生まれる。きなこは私が
忘れていた「人生にはいつも希望があり、人は
は誰とでも分かち合える」ということを思い
出させてくれた。解決策はまだ無い。

う。
。 ま あ か で
明 日 ま り た き つ
の 私 ま と こ と と
は 、 ど ん な な き
希 望 を ま と う と
作 り だ す の な き
の だ ろ う と う 。